男女共同参画

男女共同参画社会を目指して

HARMONY ハ〜モニ〜広場

2009
VOL.52

特集:ワーク・ライフ・バランス(WLB)のススメ

〜仕事と生活のバランスがとれた、活力ある社会を目指して〜

企業の取り組み ・・・・・・・・・・・ 2
いばらきコープ生活協同組合

団体の取り組み ・・・・・・・・・・・ 3
行方市商工会・特産品開発チームのみなさん

個人の取り組み ・・・・・・・・・・・ 4
専業主夫・学習塾寺子屋塾長　矢澤 政義さん

推進員活動通信・・・・・・・・・・・ 5
日立市[桐上 悦子さん]／阿見町[福田 正さん]

いばらき掲示板 ・・・・・・・・・・・ 6

情報広場・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
女性プラザ男女共同参画支援室からのお知らせ

女性のチャレンジ賞受賞・・・・ 8
モーハウス代表　光畑 由佳さん

いばらきコープで男性初の育児休暇を取得した小野瀬範久さん。

記事は▶P2

ママさんのための授乳服メーカー　モーハウス代表の光畑由佳さんが
「女性のチャレンジ賞」を受賞しました！
(写真:7月8日に開催された、おしゃべりサロン「オープン・ハウス」の様子)

記事は▶P8

"WLB"とは?　老若男女誰もが、仕事や家庭生活、地域活動や余暇の過ごし方など、日々の生活を自ら希望するバランスで展開すること。仕事と生活が良い循環を生む社会を目指すのがWLB運動の取り組みです。

■WLBについてのご質問・お問い合わせは　茨城県知事公室 女性青少年課　029−301−2178まで

ワーク・ライフ・バランス（WLB）のススメ

仕事と生活のバランスがとれた、活力ある社会を目指して

WLBの推進を図るため、子育て支援や労働時間の見直し、積極的な地域参加など、様々な取り組みを行う企業や団体が増えています。しかし、例えば「男性の育児休暇」など、制度を整備しても利用者がいなくてはWLBの実現にはつながりません。そのためには制度を利用しやすい職場の環境づくりや、利用者の意識改革が必要です。

そこで今回は、企業、団体、個人それぞれの舞台で、WLBに積極的に取り組んでいる事例をご紹介します。「自分がどんなバランスで生活したいか」という明確なイメージを、みなさん一人ひとりが持つことから始めてみましょう。

ひとつ「働き方」を変えてみよう！

カエル！ジャパン
Change! JPN

WLBの現場　企業の取り組み

男性も、積極的に育児休暇を！

夫婦の子育て新スタイル

いばらきコープ生活協同組合

人事教育部
水戸センター・チームリーダー　福島澄恵さん
小野瀬範久さん

今年の2月3日に「子育てサポート企業」としての認定を受けた同組合は、4年前から次世代育成支援対策推進法に基づく行動計画をたて、特に男性の育児休暇取得支援に積極的に取り組んでいます。

「当組合では女性の産休・育休取得率は100％でしたが、父親ももっと育児に関わって欲しいとの願いを込めて、企業としての支援方法を考えました」と、人事教育部の福島さん。「男性の育児休暇制度は以前からありましたが、利用者がいなくては意味がありません。そこで、お子さんが生まれた男性職員には、お祝いの言葉とともに育児休暇のしおりをお渡しして育児休暇取得の推進に努めました」と語ります。

『お父さん応援』と書かれたそのしおりには、出産時の特別休暇や育児休暇、育児時間短縮勤務などの制度について紹介されており、休暇を利用できる対象者の条件や育児支援金などの給付金について書かれています。

「育児休暇は利用したいけど休職すると収入面が不安、という方も多いと思います。例えば7日以上の育児休暇取得者には『育児支援祝金』として5万円を支給する他、雇用保険で給料のほぼ半額が補填されることを明記しました」と、理想論ではなく現実的な支援対策を打ち出す同組合。そして昨年、男性で初となる育児休暇の取得者が誕生しました。

男性の育児休暇取得者第一号となったのは、水戸センターで配送業務を担当していた小野瀬範久さん。奥様が産休・育児休暇を終えて職場復帰し、お子さんが保育園に通い始めた時期に合わせて育児休暇を利用しました。「忙しそうな妻を見て制度の利用を考えましたが、休職中の仕事や復帰後の事などが不安でした」と当時の心境を振り返りますが、周囲の温かい声と後押しがあり、育児休暇の取得を決心できたそうです。約一ヶ月の子育て経験は予想以上に大変だったものの、子供と過ごせた〝時間〟に満足しているという小野瀬さん。

心配していた復帰後の支障もなく、現在は配送をしている担当をとりまとめる、チームリーダーとして活躍しています。「育児休暇を取ったことで母親の気持ちも分かるようになり、自分自身がなるべく早く帰ろうと思うようになったのはもちろん、子供を持つ同僚や部下たちも少しでも早く帰らせてあげたい思うようになりました」と、以前より家庭のことを考えるようになったと語ります。

子育てサポートしています
2009年認定事業主

厚生労働省により認定された次世代育成支援認定マーク「くるみん」

POINT

平成19年度に厚生労働省が行った「雇用均等基本調査」によると、国内の育児休暇取得率は女性89.7%、男性1.56%で、前回調査（平成17年度）に比べ、女性で17.4%、男性で約3倍と大幅に上昇しているのが分かります。しかし男性の育児休暇取得率は依然として低い状態と言え、いばらきコープのように“安心して利用できる”制度の整備や“取得しやすい”環境づくりが重要な課題となっています。

WLBの現場　団体の取り組み

男性も女性も活躍する、元気な土地柄が生んだ

行方市 元気な商工会が生み出す ユニークなご当地名物！

行方市商工会・特産品開発チームのみなさん

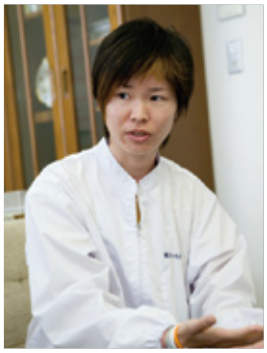
行方市商工会 地域振興課
平野敬子さん

霞ヶ浦をはじめとする、豊かな自然に囲まれた行方市は平成17年、麻生・北浦・玉造の3町が合併して誕生しました。

農産物や畜産・水産の加工品など、地元地域の特産物が並ぶ市の観光物産館「こいこい」で注目を集めるのが、霞ヶ浦で駆除の対象になっているアメリカナマズを使った「行方バーガー・なめパックン」や、名産のいちごを使ったドレッシング「おとめごころ」などのユニークなご当地名物。

これらの商品の開発・製造を手がけるのは行方商工会の特産品開発チームのみなさん。行方市商工会 地域振興課の平野敬子さんを仕掛け人に、数々の商品を生み出してきました。そのきっかけは、中小企業庁が地域資源や観光資源の開発・PRを通して地域活性を狙う「地域資源全国展開プロジェクト」の支援金。自分たちの好きな地元・行方の地域振興の一助になればとの気持ちから、開発チームが誕生しました。

開発チームのメンバーとなるのは、食品の生産や製造に従事する地元商工会の方々。それぞれが「地元を元気にしたい」との想いを胸に、積極的にこのプロジェクトに参加してきましたが、仕事を終えた後、毎晩意見交換や試作品の制作・改良のために集まる日々は決して楽なものではなかったそうです。いちごドレッシングの開発に携わった(株)フィルド食品の野原美奈さんは「なかなか味がまとまらず完成までには1年以上を費やしましたが、企業の企画からでは生まれない商品の発想は面白くてやりがいがありました」と語ります。


(株)フィルド食品　野原 美奈さん

開発の苦労と共にその楽しさを振り返り「皆さんと一緒にひとつの商品を作り上げていくという作業は楽しく、正直最初は『無理』だと感じた開発も、皆さんの積極的な協力があったからこそやり遂げることができました」と語ります。会社や自分の利益云々ではなく、純粋に〝いい商品を完成させたい〟との想いが原動力になり、開発中の苦労や忙しさが逆に毎日の仕事にも張り合いを与えたそうで、自ら『おとめごころ』と命名したところにも〝作品〟に対しての深い想いを感じます。

行方市商工観光課　大久保 雅司さん

また、「行政としてではなく地元の一個人として参加している」と語る行方市役所の商工観光課の大久保雅司さんも「行方バーガー・なめパックン」のプロジェクトへの参加を楽しんでいるひとり。観光面でのPRになるという〝仕事上〟のメリットはもちろん、「地域の産業や食文化の違いなどを知り、地域同士の一体感が生まれたことも大きな成果」と笑顔を見せます。「自分達の住む土地の魅力を知ることで参加する皆さんの郷土愛や誇りを強め、それが地域の活性化と元気な暮らしに繋がっていくことを願っています」と、地元の良さを再発見できるこのプロジェクトをライフワークのひとつとして捉えているそうです。

POINT

日本におけるWLB政策は「子育て支援」や「少子化対策」を中心に語られることが多いものですが、WLBの本来の意義である「仕事と生活の調和」を実現するためには、企業や家庭内だけでなく、それぞれが暮らす地域社会全体にも目を向ける必要があります。企業を離れた“個人”が自分の意思で集まり、特産品の開発を通して地域活性を目指す行方市商工会は、まちづくりという広義でのWLBを実践しています。

WLBの現場　個人の取り組み

経験してみて分かった、子育て・家事の大変さ

専業主『夫』のススメ

専業主夫・学習塾寺子屋塾長　矢澤 政義さん

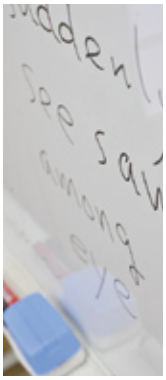
日立市で学習塾「寺子屋」を開く矢澤政義さん。自宅で塾を始める数年前までは、収入のある〝仕事〟を持たない専業主夫でした。

「元々は夫婦で共働きをしていましたが、お互い残業は当たり前の毎日で、保育園に子供を迎えに行ってからまた仕事に戻ることも少なくありませんでした。当然子供との触れ合いは少なく、家事の時間もないので洗濯物も山積み。これではいけないと、どちらかが仕事を辞めようと話し合うことになりました」と、矢澤さん。職場における将来性と収入を〝合理的〟に考慮し、奥さんが仕事を続けることに決めたそうです。

夫婦の間ではスムーズに決まったものの、周りの反応は予想以上に大きなもので、職場の上司からは「悩みがあるのか？」「今の部署が不満なのか？」と聞かれ、『家事・育児に専念するため』という辞職理由に納得してもらうまで半年近くかかったそう。

「女性陣はすんなり理解してくれて、励ましの言葉や、餞別を贈ってもらったりしたのに、男性からの反応は驚きや反対ばかり。自分達夫婦の考えと世の中の固定観念のギャップにとまどいを感じました」と、仕事を辞める苦労を語ります。さらにご両親にも猛反対され、こちらは専業主夫になって最初の1～2年は理解してもらえなかったそうです。

それでも、2人の子供を抱えて矢澤さんは〝主夫〟生活を開始。「毎日子供と一緒に過ごすことができ、家をピカピカに掃除したり、ご馳走を作ったり、絶対楽しいと思っていたのですが、10日ほどですぐにうんざり。最初は自分でもその理由が分からず、毎日鬱々としていました。気分転換に、と元同僚と飲みに行っても『3食昼寝つきで羨ましい』等、羨望の言葉ばかり（笑）。ひとりで家事をこなす苦労や、下の子供をおぶって授業参観に出る忙しさに共感してもらえず、余計にフラストレーションがたまりました」と、ここでも周囲とのギャップを痛感。しかし、PTA活動の参加などを通して積極的に主婦仲間を増やしたことで、苦労や悩みを語り合える友達ができ、子育てや家事が楽しくできる生活に変わっていったそうです。



「専業主夫をしたことで世界が広がり、人生が2倍になったと感じています。世の男性も、せめて1ヶ月は育休等で専業主夫を経験するべきですね」と、専業主夫のススメを強く語ります。

矢澤さんからのメッセージ

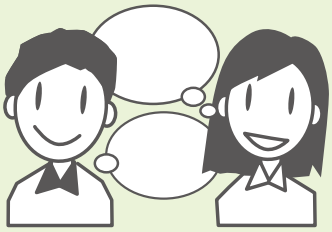
専業主夫をしてみて実感したのは、子育てには父性と母性両方のバランスが大切だということ。母子家庭や父子家庭の場合は、地域の大人が「母親代わり」「父親代わり」の役目をすることができると思います。

仕事と家庭のある社会生活のバランスも同じ。男性の役目、女性の役目と決め付けず、お互いが理解しあって協力関係を築いて欲しいですね。

1965年2月10日、茨城県高萩市生まれ。
茨城大学人文学部卒業後、水戸市内の学習塾・予備校に勤務。
その後、日立製作所の関連会社（人事・教育担当）に勤務するが、「家事・育児に専念するため」退職。
子供の成長に伴い自宅で学習塾を開き、受験指導などに当たってきた。主夫歴12年。
県内多くの自治体や幼稚園から大学、育児サークルなどで、講演者やパネリストとして活動し、現代の家事・育児の難しさ、男性の参加を強く訴えてきた。

POINT

“男性も女性も社会の対等な構成員であり、社会のあらゆる分野において均等な利益を享受すると共に、責任を担うべきである”という「男女共同参画」の基本理念。「育児や家事は女性の役割と決め付けず、男女がお互い協力しあうべき」という矢澤さんの言葉にもあるとおり、WLBの実現のためには、夫婦はもちろん、あらゆる面においての男女間の協力関係が求められています。



いま、自分にできること 推進員活動通信

「より自分らしく生きられる」まちづくりのために、
実現に向けた身近な活動をご紹介。

日立市の地域活性化のために

日立市 桐上 悦子さん

こんな活動を実践中

日立市は、かつての日立鉱山の煙害から人々を守るために植えられたオオシマザクラが美しい景観のさくらの町です。その「さくらを守る会議」の一員として、さくら特有のテングス病の調査や日立女性フォーラムの一員として、より良いさくら祭りを目指してアンケート調査をしました。今年のさくら祭りでも、休憩所を設け、観光客向けに作成した食事処マップとさくら茶等の提供を行いました。

みんなで協力してさくら茶などを提供しました。

平成18年度は、日立市男女共同参画を進めるつどいの実行委員として、江川紹子さんを講師にお招きした講演会では、接待係として江川さんがプロデュースしたCD（初の男性歌手による子守唄）を接待室の入口に置いてお迎えしました。

地図づくりワークショップの様子

また、国立女性教育会館で行われた地図づくりのワークショップに参加するなど、自己啓発にも取り組んでいます。

これからのチャレンジ

これらの活動を通して、男性も女性も、相手を思いやりながら努力し、協力することの大切さを改めて感じているところです。

県の女性フォーラムの一員として環境問題について学んでおり、2年目である今年は県に提言できるよう努力すると共に、ボランティア精神で力を注いでいる多くの方々と協力して、男女共同参画の輪を広げていきたいと思います。

阿見町に女性センターを

阿見町 福田 正さん

女性センターを求めて

私は、阿見町に「女性センター」を開設して活動したいと思い、北海道から九州まで主だった市町村の男女共同参画実施計画の進行等を調査しました。

その中で訪問した「徳島市女性センター」は、市内最大のデパート内の一室にあるため、買い物に訪れた際に寄ることで、気軽に男女共同参画に触れられます。そこでは、行政1名に公募のスタッフ4名によるセミナーや情報誌の発行、相談会等が行われています。

その他、大分市や福岡市、銚子市等も訪問してみましたが、女性センターを開設していない市に今後の予定を訪ねると、開設は難しいようです。

つくば市民活動センターの「模擬女性センター展示」

阿見町に「女性センター」の開設が実現できたら、団体の交流やネットワーク形成に向けて積極的に活動し、男女共同参画の普及啓発に努めていきたいと思います。

平成15年3月に「男女共同参画プラン・とくしま」が策定されました。

男性陣の参画

男性の参画率を上げることも目標にしています。

私が、平成14年度に阿見町男女共同参画推進員会議の委員の委嘱を受け、団体活動等に取り組んで7年目ですが、男性は私1人です。男性の参画率を上げるためには、どのようなアピールをしていけばよいのかも今後の課題です。

阿見町の男女共同参画プランが策定されて4年目になります。先進自治体に学びながら、推進員同士の共同体制を整えて活動していきたいと思います。

イベントレポート

男女共同参画セミナー及び茨城県男女共同参画推進員研修会を開催しました

５月26日（火）に茨城県立図書館で、
「男女共同参画セミナー及び茨城県男女共同参画推進員研修会」を開催しました。
茨城県男女共同参画推進員や市町村職員を中心に、一般の方々にもご参加いただき、
150名を超える参加がありました。
前半はNPO法人男女共同参画おおた理事長の牟田静香さんの講演会、
後半は茨城県男女共同参画推進員の取組み事例発表を行いました。

講演会「人が集まる男女共同参画セミナーの作り方」

講師の牟田静香さんは、行列のできる講座で有名な方で、今回は「人が集まる男女共同参画セミナーの作り方」と題した講演をしてくださいました。

牟田さんがこれまでに企画してきた講座の成功例や失敗例など、具体的な事例を交えながら、人を集めるための企画や広報のコツなどを伝授してくださいました。「人が集まらないのは、企画や広報戦略が間違っているから。人が集まらなかった言い訳探しに時間を費やすよりも、どこがよくなかったのかを反省・分析して一人でも多くの人が集まる次の企画をした方がいいです。失敗はバネになりますよ。」と力強く語る。タイトルの付け方やチラシの作り方など、技術的なアドバイスもいただき、目からウロコの情報が満載のお話しでした。

参加者からは、「これまで講座に人が集まらず困っていたが、牟田さんの話を聞いて心に明るい風が吹いた。」「男女共同参画社会を目指して頑張らなくては、という意欲が湧いた。」という声が寄せられました。

福地季子さんの取組み事例発表

推進員取組み事例発表　福地 季子さん

推進員の個人活動事例を代表して日立市の福地季子さんに、事例発表をしていただきました。福地さんは「日立市男女共同参画をすすめる集い」と関わりながら、朗読劇のシナリオ作成や、商店街マップづくりなど様々な活動をしており、幅広い分野での活動の様子を紹介しました。中でも、外国人男性に自国の料理や男性の家事への関わり方をインタビューし、レシピ集を作成したというオリジナリティあふれるイベントの紹介が印象的でした。

推進員取組み事例発表　服部 恵子さんのグループ

坂東市の服部恵子さんにはグループ活動事例を代表して発表していただきました。服部さんのグループは、朗読劇の活動をとおして、男女共同参画について誰にでも分かりやすく表現し、広く意識啓発を行っています。今回は７名のメンバーで、朗読劇「雨に濡れた洗濯物 part II －坂東市の正月－」を実際に演じてくださいました。育児休業を取るかどうか悩んでいる男性を家族が後押しする、という内容で、ワーク・ライフ・バランスについて分かりやすく表現されていました。

服部恵子さんのグループの朗読劇

情報広場

女性プラザ男女共同参画支援室からのお知らせ

◇平成21年度男女共同参画チャレンジ支援セミナー

「自分らしく　生き方上手　～心身ともにすこやかに生きるちからを磨く～」

職場や家庭などの日々の暮らしの中で、ストレスを感じたり、気持ちがへこんだりしませんか?
そんなときに気持ちを元気にリセットできる、とっておきの秘訣が学べます。ぜひご参加ください。

[日　　時]　平成21年9月10日(木)13:30～15:30
[場　　所]　女性プラザ男女共同参画支援室
[講　　師]　(医社)温心会 ヒヨドリ医院 心理課長
　　渡辺 めぐみ氏(臨床心理士、スクールカウンセラー)
[参 加 費]　無料
[募集人数]　30名(先着順受付)

◇チャレンジ相談のご案内

再就職や起業、キャリアアップ、地域活動など、様々なことにチャレンジして、新しい可能性を切り開いていこうとしている方を応援するため、コーディネーター・相談員が、皆様方一人ひとりのニーズに応じたきめ細かなアドバイスや関係機関の紹介等の情報提供を行っています。
「何か始めたいが、何から始めればいいの」「再就職したいが、ブランクがあるので不安」「起業したい、NPOをつくりたい」「どこに相談したらよいかわからない」など、お気軽にご相談ください。

[相談日時]　月曜日～金曜日　9:00～17:00
[会　　場]　女性プラザ男女共同参画支援室(面接相談の場合)
[相談方法]　・面接(要予約)　・電話　・FAX　・Eメール
[相 談 料]　無料

※FAX又はEメールによる相談をご希望の場合は、次のサイトから「チャレンジ相談票」をダウンロードして、相談内容等をご記入の上、ご送付ください。

〈茨城県男女共同参画チャレンジ支援サイト〉http://www.challenge.pref.ibaraki.jp/

◇おしゃべりサロンのご案内

おしゃべりサロンは、家族、子育て、人づきあい、仕事などについて、日頃感じていることや悩み事などを参加者同士で一緒に話し合う交流・情報交換の場です。金曜の昼前のひとときを、くつろぎながら集まった者同士、互いに思いを語り合い、一緒に新しい可能性を切り開いていきましょう!

[日　　時]　平成21年8月7日(金)、9月4日(金)、10月2日(金)、11月6日(金)、12月4日(金)
　　平成22年2月5日(金)、3月5日(金)　※いずれも10:00～12:00(2時間)
[場　　所]　女性プラザ男女共同参画支援室
[募集人員]　各回10名(先着順受付)
[参 加 費]　無料

〈お申込み・お問い合せ先〉
女性プラザ男女共同参画支援室
〒310-0011 水戸市三の丸1-7-41 いばらき就職支援センター(ジョブカフェ)3階
TEL:029-233-3982(サンキューハーモニー)　FAX:029-233-1330
E-mail:josei1@pref.ibaraki.lg.jp

・水戸駅から日立方面に向かって徒歩約10分。
・車でお越しの方は三の丸庁舎(旧県庁舎)の駐車場をご利用ください。
　無料利用券をお渡しいたします。

写真提供：茨城新聞社

モーハウス代表 光畑 由佳さん

平成21年度女性のチャレンジ賞受賞おめでとうございます

光畑さんは、ご自身の電車内での体験をきっかけに、授乳時に肌が見えない授乳服を製造・販売。赤ちゃんと一緒に外出できるライフスタイルを提案してきました。また、子連れ勤務を実現し、子育て中の女性が育児と仕事を両立できる就労環境を整えています。

この功績を讃え、平成21年6月26日(金)に小渕優子男女共同参画担当大臣より女性のチャレンジ賞が贈られました。

女性のチャレンジ賞とは？

起業、NPO法人での活動、地域活動等にチャレンジをすることで輝いている女性個人・団体・グループ等、全国で6組に男女共同参画担当大臣から贈られる賞です。茨城県からの受賞者は平成16年以来5年ぶりの快挙です。

光畑さんの著書
「働くママが日本を救う!『子連れ出勤』という就業スタイル」

"いつでもどこでも快適母乳生活"がテーマの授乳服

「授乳服は、お母さんの授乳ライフを楽しくラクにできるものだから、すぐに喜んでくれると思っていた。でも『誰もが経験しているものだし、我慢するわ。』といって、なかなかその快適さを受け入れていただけなかった。」

男性には、わりとすぐに授乳服の便利さを分かってもらえたようですが、女性は真面目に考えて我慢しがちだったそうです。

そんな時を経て、今、自分の活動を認めてもらえたことに、感謝していると光畑さんは言います。

新スタイル！子連れ出勤

スタッフの中には、赤ちゃんに母乳を飲ませながら仕事をしている人がいます。子連れ出勤をしているスタッフの家族の反応はどうだったのでしょうか。

「ご家族の中には、子連れで働くことへの不安もあるようです。働く前に家族間でしっかり話しあってもらう必要がありますね。」

実際、子どもを抱きながら仕事をするのは、大変そうに見えます。しかし、スタッフの感想は、「育児だけの頃の方が逆に大変だった。今の方が気持ちの上でラク。」とのこと。1つのものだけに集中すると、小さなことが大きなことのように見えてしまうのかもしれません。

光畑さんにとってのワーク・ライフ・バランス(WLB)とは

「バランスは私にとって、とても大事なテーマ。よくいわれるWLBは早めに会社から帰って、あとの時間はプライベートというものですが、私は、起きている時間は仕事をしていて、生活を間に差し込んでいる感じです。これを私は『ワーク・ライフ・ミックス』と呼んでいますが、自分自身が生活を大切にしていれば、仕事と生活を無理矢理切り離す必要はないと思います。」

WLBにもいろいろな形があっていいと光畑さんは語ります。

今後の活動の予定

「これまでにモーハウスで子連れ出勤を経験してきたスタッフは約150名にもなります。これは大きな財産だと思いますので、彼女たちが子育てしながら仕事をした経験を話す機会をつくっていきたいと考えています。」

また"マザー・ライフ・アソシエーション(通称：らくふぁむ)"という団体を立ち上げ、活動している光畑さん。初めての子どもを育てているお母さんたちが、2人目・3人目の子どもを育てる時のように肩の力を抜いておおらかに子育てできるようなイベントを企画中だそうです。

光畑さんの活動は今後ますます広がっていきそうです。

2009年7月31日(金)発行
発行：茨城県知事公室女性青少年課　〒310-8555　水戸市笠原町 978-6
編集委員（男女共同参画推進員）：圷 佐代子　西野 禮子　吉田 光代（50音順）
制作：セン・グラフィックアーツ ナカクリエイティブスタジオ　〒311-0105　那珂市竹ノ内 4-1-4
検索 http://www.pref.ibaraki.jp/bukyoku/bugai/josei/